ウクライナ避難者支援のための情報共有会議
―　第20回議事メモ

日時：2024年2月22日（木）18：30～20：30

場所：オンラインzoom

参加者：38名

＊団体、個人名については敬称略にて掲載しております。

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

自治体、支援団体からの報告と質疑

＜愛知県　多文化共生推進室　中奥さん＞
・ウクライナ侵攻開始から2年になる。愛知県内には140名が避難して生活されていいる。来年度も同様の支援を予定しており、皆様が少しでも心穏やかな日々が訪れることを願っている。
・2/24(土)に愛知県が後援を出している「ウクライナ復興支援チャリティ・コンサート」が名古屋市栄で予定されている。主催はジャクユーサポート。愛知県知事も挨拶に伺う予定だが、ぜひ多くの方に参加していただきたい。
・2月の寄付部品配送は、先月に引き続き株式会社ローソン様よりカバンなど生活雑貨、三重県の農家よりビーツを頂き配送を予定していう。
・県が行っているウクライナ避難民への寄付金の募集について、寄付受付の方法が拡大された。寄付者の利便性を高めるためキャッシュレス決済が利用頂けるようになった。多様な手段で寄付をしていただけるようになるので、多くの方にご協力をいただきたい。
詳細は愛知県HP：https://www.pref.aichi.jp/soshiki/tabunka/tabunka-ukraine-kihu0216.html

＜名古屋市　国際交流課　石川さん＞
・前回の会議の際に報告をしたふるさと納税を活用したクラウドファンディングについて、2月に入る前に目標額を達成することことができ募集を終了した（クラファン WEBサイト：https://www.furusato-tax.jp/gcf/2601）。この場をお借りしてご協力にお礼申し上げたい。 来年度予算の議決はこれからとなっているが、名古屋市の事業の方針はこれまでと変わらず進めていく、名古屋市に避難されている皆様とともに歩んでいくという方針である。

・避難者の人数は、1月末現在で73人。直近では身元保証人なしで来日された方が名古屋市に転入されており、2月末時点の報告としてさらに増加する予定。

自治体、支援団体からの報告と質疑

名古屋出入国在留管理局　在留支援部門　乾さん

進行：先月の会議にて「補完的保護対象者認定制度」をメインテーマ取り上げた際に質問があり、回答が保留となっていた事項について回答いただきたい。
Q1：補完的保護対象者として認定された方への定住支援プログラムは、難民認定者向けの定住支援プログラムと一緒に行うのか。
A：原則別々に行う。
Q2：補完的保護対象者向け定住支援プログラムに参加する人はウクライナ国籍のみか。
A：同制度はウクライナ国籍に限られた制度ではないため、他の国籍の方も認定されれば対象となる。
Q3：定住支援プログラムはウクライナ語、ロシア語で行われるのか。
A：生活ガイダンスはウクライナ語、ロシア語の通訳つきで実施を予定している。日本語教育については日本語で行われる。
Q4：補完的保護対象者認定申請、定住支援プログラムの申込みにおいて意図せず記入を誤り、それが原因で不認定になったり、定住支援プログラムに参加不可となってしまった場合はどうするか。
A:それぞれの申請先に相談頂きたい。補完的保護対象者認定申請については名古屋入管の難民調査部門。定住支援プログラムについては公益財団法人アジア教育福祉財団難民事業本部へ。
Q5ハローワークでの就労支援は具体的にどのようになるか？認定された者への特別な支援はあるか。
A:一般的な職業紹介、職業訓練。特別な支援が行われることは現在のところないようだ。
■定住支援プログラムの支援センターについて、来年度回目の実施については首都圏を予定。名古屋市でも対面学習を希望しているという要望は承った上で、本庁へ伝えた。今は結果についての話はないが、参考情報として検討される。
■名古屋入管の管内で難民認定申請をしているウクライナ国籍の方の数については公表不可のため、ご了承頂きたい。令和4年の数はホームページで公表されているが、ウクライナ国籍は個別の国籍として公表はされていない。公表されている国籍で一番人数が少ない国がブルキナファソ11人のため、それ以下の人数、またはいなかったということになる。令和5年（年度ではなく年単位での集計）の数字が公表されるときに国籍として出てくる可能性はあるが、そうではないかもしれない。
進行：補完的保護対象者認定制度が始まったのが令和5年12月からであるため、令和4年分の人数が多くなるのではないか、という想定はされますね。また今後の会議でもご報告、質問をお願いしたい。

自治体、支援団体からの報告と質疑

あいち・なごやウクライナ避難者支援ネットワーク／認定NPO法人レスキューストックヤード　加藤絢子　堀田美希子

＜現在の主な相談と課題＞

【個別相談】

＊就労について（履歴書・問い合わせ等の補助）　＊物資の調達やその補助・提供品の運搬　＊届いた郵便物の内容を教えてほしい

＊各種書類申請の問い合わせやその補助　＊日本語の表現の仕方を教えてほしい　＊市営住宅について入居に伴い家具家電の調

＊引っ越しに伴い、水道ガス電気の開栓　＊転入届等の申請　＊各市営住宅自治会長への挨拶の同行他

＊日本の運転免許を取得したい　＊印鑑を作りたい

＊病院に同行してほしい（身元保証人がいない方が名古屋市に転入する機会が増えた。クリニックを見つけるところから手伝い。最初は同行するが、なるべく自分で行くようにしたいという声もありそのような方針で支援している）

＊住宅の基本的ルールや使用方法について（電気のブレーカーの位置、お湯の沸かし方、電気のつけ方を含めて一からの説明。引越し翌日以降も、電話やメールでそういった相談がある）

【課題】

＊市営住宅入居に伴う家具家電の調達　＊経済的不安→就労できていない・転職したい　＊低年齢児や高齢者以外の支援の不足

＊心的ケアの必要性　＊世間の関心の薄れ

＊体調不良や持病について（日本の室内は冬は寒い、インフルエンザなど感染症、持病の病院での説明の仕方）

＊居住エリアでのコミュニティについて（避難所、災害が起きた時にどうするかを日頃から伝える大切さ）

石川県でのウクライナ避難者支援について

NPO法人YOU-I　代表　山田和夫さん　谷さん、リュボフさん

・石川県よりウクライナ避難民の支援事業を受託している。避難者であるリュボフさん、谷さんご夫妻を雇用し支援にあたって頂いている。本日はまずそのお二人からご報告頂く。

＜谷さん、リュボフさん＞
・石川県内には17名程度のウクライナ人の方が在住（ 50代が多く、 20代が1,2名、10代が3名程）。2022年時点でほとんどの方が別の場所に住んでおり、横のつながりがないため 2023年にグループを作って連絡網を作成した。しかし、住んでいる場所が遠いことからイベントなどを開催しても毎回メンバーが同じで、新規メンバーの参加や頻度の高くない方の参加が課題となっている。金沢に来てもらえればイベント参加ができるという形になっており、この問題を解消したい。避難民の方も運転免許を取っていかないと交流が難しい状況になってきていると感じている。
・能登半島地震について：ウクライナでは地震が発生しない為不安を感じている人も多かった。特に一世帯は輪島に住んでいた（今は石川県に住んでいない）ため、食べ物がないなどの問題があった。ネットワークを通そうとしたが、自分たちも被災しバタバタしており、支援の難しさを感じた。ただ、金沢在住の避難者については連絡が取れていたため、安否確認はできた。

＜山田さんより、能登半島地震支援について＞
①石川県生活相談センター多言語対応： 1月2日に地震関連相談窓口を立ち上げた。コロナがあった関係で元々県の委託で開いていた窓口があり、それを1日の夜にリニューアルして県に持ち込んだ形。参照 URL:https://support.ishikawa.jp/index-ja.html

②名古屋入管臨時相談会の開催支援： 1月18日より計3回開催（今後もう一度予定している）。通訳や運営のサポート。初回は各市の国際交流担当者の方に集まっていただき、地震後に出された特例について話してもらった。外国人の就労支援を行う会社を　5年前より立ち上げた関係で、被災したことは間違いなく再就職において大きなハードルが出てくると考え、行政に対し支援を要請していたことで特例が出てきた。それについて、行政担当課より説明して頂いた。また、県内中部・中部以南の行政担当者向けに、今後おそらく予定されている二次避難受け入れに関する特例について情報共有する会を開催した。

石川県でのウクライナ避難者支援について

NPO法人YOU-I　代表　山田和夫さん　谷さん、リュボフさん

③外国人専用物資輸送ライン：1月3日より、ムスリムの方や日本語ができない方が情報孤立をし、目の前にある避難所に行けない、給水所が分からないという事案を聞いた。当団体が大使館や NPOなどからの物資を直接受けることになり、能美市の運送会社の倉庫を借り、中継地点となる七尾市にも拠点を置き、そこから AARJapan、現地にいるNGO・NPOなどと連携して必要としている人の手元まで物資をお届けするというルートを作った。８日に意見が上がり、 14日に体制を築いた。

・行政との連携について：
石川県も予測できない事態で支援に遅れがあったが、それは非難できない。私達自身もこのような大きな災害が起きるとは予測できていなかった。発生当日、石川県とスタートアップとして連携しようと考えていたが、前例のないことは一つ一つ上に決済をとるという体制で、非常に動きが遅いことから、県と協力する部分が 2 割、8割は自分たちNPO単独で動くこととした。全国から支援のお声がけをいただいた NPONGOや企業と、現地入りしている団体とをつなぐ役割に徹した。リクエストに対して　1～3日で答えていくという動きを取った。

・情報をいち早く発信、ニーズをつかめた理由について：
当団体は、30か国80名で集まっており、このメンバーが普段から母国語で SNSでつながっていたため、いち早く情報とニーズを得られたことが大きい。情報が多言語化されていない、また、情報が多言語化されていてもそこにたどり着く過程が日本語を介していたりしたため、たどり着けないという問題があった。これに対して日本語を介さずに在住の外国人の方たちと繋がっておくことが大事だと思った。緊急事態に対してはできる限り現場の人たちが現場サイドで判断をしていく動きが必要だということも学んだと思う。

石川県でのウクライナ避難者支援について

NPO法人YOU-I　代表　山田和夫さん　谷さん、リュボフさん

・現在、次のステージとして再就職が課題になっている。予想通り、技能実習制度は限られた業種の作業にまでビザが結びついているため、転職・転籍が非常に難しい。また、企業や管理団体の利害関係などから非常にブラックな業界であり、かなりブラックな企業があることも把握しているが、どのようにして切り離して特定技能の在留資格に持っていくかを調整している。法律の問題であり、技能実習生の特徴的な課題だ。約200人くらいが私たちのところに相談に来ており、 1000人ほどが被災したと聞いている。

・言葉ができない中で情報孤立していたが、各市の国際交流協会の日本語教室が在住外国人の方と繋がっている。日本語を教えるというよりも相談に乗るというスタンスのところも多く、普段からつながりがある各日本語教室のネットワークを通して、支援物資をお届けすることもできている。今後、県外の支援団体が撤退された後も、そのネットワークを通じて、しっかりと支援をしていけるだろうと思っている。

＜能登半島地震支援で感じたこと＞

・当団体は災害支援の専門ではないが、日頃から母語でコミュニケーションがとれる　SNS等ネットワークの整備、それに加えて、行政機関が予算を支援するなどして繋がりをキープしていくことが大事だと思う。

・日本語教室など各地域密着のところで在住外国人の方の所在と繋がりを作っていくこと。災害への最大の備えになると考えている。次のステージとして再就職の問題が出てきているが、発生当初からこれまでの支援の中で感じた上記の点を各地域に伝えることで少しでも備えてもらいたい。

JUCA（NPO法人日本ウクライナ文化協会）

理事長　川口プリスリュドミラさん　　副理事長　榊原ナターリアさん

1）イベント等スケジュール

・新規で転居した避難民へのサポート、すでに在住している避難民への支援を継続している。

・毎月1回ヨガ教室を行っている。毎月テーマに応じて変化し、アクロ、リラクゼーションなどを体験した。同じ日に子どもたち向けウクライナスクールを以前から行っているが、今月からコンセプトを変えて　1日預かりとし、19人も参加した。（そのため、ヨガクラスの新規参加者も増えた）教師も避難民。年齢の違いや勉強の進度も違うので、先生たちがクラスを分けて説明できるようにしている。今回は　2時間のクラス。先生と運動、ストレッチなども取り入れた。一番上は 14歳が参加し、小さい年齢の子どもも参加している。子ども達からも楽しかったという声が聴かれている。また来月もやりたい。

・手作り品サロンは主に高齢者が参加しているが、作品は 2/10のバザーに出展した。名古屋市と一緒に。新しい避難民が名古屋市にきている。これからもサポートを継続したい。

2）ウクライナ一時帰国報告（川口さんより報告）

・土曜日にウクライナへの一時帰国から戻ったばかり。 16日間ウクライナにいた。キーウから約130キロ西のジトームィル市に自宅がある。昨夏帰国した時も、今回も爆発はそんなになかったが、夜中にサイレンは多かった。ウクライナ東部に比べると少ない、ロケットが飛んでいたかもしれないが、キーウまでは来ないという状況である。今年は特に暖冬だった。しかし、皆元気がないように感じた。戦争が始まって　2年になる。物価も高くなり住民は大変である。ガソリンは日本より高い（ 200円/リットル）。

・ウクライナに一時帰国する際、支援物資を持っていった。またハルキウ州クピャンスク市へ寄付金を送金し、燃料購入の支援をした。同市はロシアの国境から30キロしか離れておらず、電気や暖房が頻繁に止まり本当に大変。避難している人が多く、残っている人は数十世帯で大変な状況。また、昨日からロシア軍が入るという情報があり、ウクライナ軍が急いで避難させている。

JUCA（NPO法人日本ウクライナ文化協会）

理事長　川口プリスリュドミラさん　　副理事長　榊原ナターリアさん

（3）その他、避難者の近況などについて

・戦争終結が見えない中、日本にいる避難民は日本語の勉強をしなければならないと思う。新しく　3月から日本語教室のコースが始まる。以前もやったが、目的が明確にならなかった人には効果が出づらかった。 4月から開始するコースは能力試験を行うこととし N4をベースに開始する。これから日本に住み続けるために能力試験に合格することを目標とし開講する。
・一人の避難民が事故に遭ったが、どうしたらよいかわからずそのまま帰ろうとした。相手も警察を呼ばなかった。去年も一人避難者が事故に遭ってリハビリが必要な大きな怪我を負ったこともあった。今後こういったときにどう対応するか伝えていきたい。
・2月24日は侵攻開始から2年を迎える。栄でデモを行う、ぜひ多くの方に参加していただきたい。
進行より：
・お二人とも無事に日本に帰国された。ニュースでもウクライナの戦況が伝えられることが増えていていずれも厳しい状況。支援も減っていると言われている。現地への支援も引き続き必要だと伝えていきたいと思っている。避難者も命からがら逃れてきた人がこの地域にもいて話を聞いている。
・避難の長期化に伴って、車がないと生活が不便という免許を取りたいという相談も増えてきている。車や自転車の運転をするということは同時に事故のリスクも有るということ。１１０と知っていても日本語がができないためかけることを躊躇したり、そもそも１１０や１１９を知らないという人もいるだろう。まずは警察や救急車に電話をすることが重要なことだと改めて呼びかけることも必要ではないかと感じた。

ウクライナ侵攻から2年　避難者からのメッセージ

（1）ウクライナ東部出身　40代女性

私たちが日本に来てから約 1年経ちます。
避難することになったきっかけは、家のすぐ近くに爆撃があり、多くの人々が犠牲になったことです。そこに住み続けることに恐怖を覚えたのです。日本には娘がいたので彼女を頼って来ました。
今では来日した当初よりもだいぶ行動範囲が広くなってきました。私は　12月から週4回日本語教室に通っていて、もうすぐ 3ヶ月のコースが修了します。ひらがなやカタカナは全て書けますが、話すことはまだ難しいです。日本語を勉強するのはとても楽しいし、ためになるので終わってしまうのが残念です。また、日本語教室の後で仕事をしていますが、職場の方々はとても親切で気持ちよく働いています。午前中は日本語教室に行き、午後からは仕事で帰りが 23時近くなることもあります。帰宅後は日本語教室の宿題や復習をしています。自転車で通学・通勤しているので、雨が降ると大変です。
母も以前週1回3時間の日本語教室に通っていましたが、受講期間中に歯が急に痛み出し、その治療のために途中から通えなくなり、学習が中断されてしまいました。しかし、勉強したとしても年金生活者の年齢なのでなかなか言葉を覚えることができません。また、母は一人でバスや地下鉄を使って移動するのも難しいのですが、それでも何回か行き来して覚えたバスには一人で乗って出かけられるようになりました。
今、月1回ほどレストランでウクライナ料理を一般の方々に提供する機会があるのですが、そこで厨房スタッフとして働くこともあります。また、何人かの避難民との合唱サークルで歌を歌っています。今も公演に向けて週に一回ほどリハーサルに励んでいます。
　私たちは、週末にはウクライナの戦争反対の集会やいろいろなイベントに参加したりしています。私にとって日本で　1番問題に感じているのは、言葉です。母にとっては仕事です。ウクライナにいればケガをした兵士のお世話をしたり、何かしらできることがあるのに、自分は今日本にいて、「いったい何をしているのだろう」ともどかしく感じています。今は家で動画を見たり、ラジオを聴いたり、料理をしたりして過ごしていますが、本当は何か仕事をしたくてたまらないのです。何かをしていないと戦争のことを思い出してしまうという理由もあります。私も何もしていないふとした瞬間に、訳もなく急に涙があふれてくることがあります。
それでもどうにか前を向いて生きようとしています。母は、時々血圧が高くなったり、脚や股関節が痛みますが、私は健康です。
　日本の皆さんには私たちを支援していただき感謝しています。ありがとうございます。

ウクライナ侵攻から2年　避難者からのメッセージ

（2） ウクライナ西部出身　10代男性

私は戦争が始まった当初は、ウクライナを離れたくなかったのですが、その後避難することを決めた経緯についてお話しします。

戦争開始後の１年間、私は多くのボランティア活動をしていました。どれも大したことではないのですが、軍のために迷彩ネットを編んだり、ロケット弾から守るために建物を強化したり、食糧や生活必需品を運ぶのを手伝ったりしていました。私は自分なりに計画を立ててそれに沿って行動していました。ところが、家族の事情から別のウクライナ西部の街に住んでいる兄のもとに引っ越すことになりました。しかし、その街でも砲撃がますますひどくなったので、私は兄と共に避難することを決めました。まずポーランドで　3ヶ月暮らし、日本に避難する準備をしました。なぜ私たちが日本を選んだかというと、元々兄は、日本の文化に魅了されていて、将来は日本に住むことを夢見ていました。また私も、外国でその文化を学ぶために少なくともその国に 1年間ほど住んでみたいと思っていたのです。しかし、このような理由でそれが実現したことは残念で仕方がありません。

日本に到着すると日本の皆さんが私たちをとても温かく迎えて下さいました。食事や滞在する宿舎を提供して下さり、また日本語を学ぶ機会も与えていただきました。このかけがえのない支援にとても感謝しています。

私は今、ウクライナの教育機関のオンライン授業を受けています。しかし、それには多くの時間と労力が必要なので、普段はそれ以外に何かをしたいという気持ちにはなかなかなれません。でも、私はめげずに強く生きていこうと思っています。日本に暮らす上で私にとって言葉以外は何の問題もありません。日本とウクライナは、食べ物から始まり、人々との付き合い方や社会規範まで何もかもが違います。料理をする時、あまりにも食材が違いすぎて困ることもありますが、それは私にとってかえっていい点でもあります。そのおかげで新しい料理を覚えたり、また以前には思いつかなかったような料理も作れるようになりました。

そして一番の違いは、人々です。どう表現したらいいかは分からないのですが一。

でも、私は日本の全てが好きですし、生活にもすぐ慣れました。とにかく日本が好きなので、とりあえずしばらくは日本にいたいと思っていますが、将来のことはまだ分かりません。

ウクライナ侵攻から2年　避難者からのメッセージ

（3）ウクライナ東部出身　50代女性

　私にとって戦争は2014年の春に始まりました。私は 8年以上、国境付近で戦争が行われている中で暮しました。その間ずっと砲撃を受けたり、人々が亡くなるのを間近で見てきました。 2022年3月、さらに攻撃が強くなりました。約 20日間砲撃にさらされ、電気も通信手段も食料もなく、またマイナス 15度の中、暖房もない中で過ごしました。その間救援活動はなかったので、砲撃をすり抜け、生きるために食料や水を探しました。

　しかし私は奇跡的に生き延び、砲火の中、徒歩で町から脱出しました。私はこれまで　2度にわたって全財産と住居を失ったのです。日本に避難することを決めたのは、元々日本の歴史や文化に興味があったからです。私はポーランド経由ではなく、複数の国を経由して自力で日本に辿り着きました。

　日本に来てから1年余り経ちます。日本政府、県や市は、私に理解と配慮をもって接してくれました。現在、私には市営住宅が提供され、無印良品からはベッド、食器、洗濯機、寝具などの購入を支援していただきました。また、様々な方々のおかげでいろいろなイベントに参加することができました。温泉、コンサート、水族館などに行く機会もいただきました。その時間は、私がこれまで体験し耐え抜いてきた事実をほんの少しの間だけでも忘れることができるのです。

　私が抱えている問題は、言葉の壁と専門の仕事に就けないことです。そして、何よりウクライナにいる家族に会えないことです。

　名古屋の皆さんはとてもフレンドリーなので、私はとても気持ちよく生活をしています。仕事のない日には散策をし、草花や木を眺め、観光名所、寺院を訪れたり、展覧会やコンサートに行ったりもします。もちろん日本語の勉強もします。

　私はもうウクライナに戻らないと思います。住む家がなくなり、帰る所がないからです。小さなスーツケース一つのみを持ち日本にやって来ましたが、それが私に残された全てなのです。これから私は、何もない状態からまた新しい人生を再スタートさせます。私のためにこれまで関わって下さった方々、今まさに関わって下さっている方々皆様に感謝します。

ウクライナ侵攻から2年　避難者からのメッセージ

（4）ウクライナ中部出身　10代男性

　私は、戦争が始まる前から、日本へ行ってみたいという思いがありました。元々音楽が好きなのですが、日本の楽器である琴の音楽に惹かれたのです。それに伴い、言葉そのものにも関心を持ち学び始めました。最初は家庭教師に教わり、さらに大学で学び続けました。
戦争が始まってからは両親も私が日本へ行くことを後押ししてくれ、色々な面でサポートしてくれました。なぜなら、ウクライナにいると危険だからです。私が住んでいた家の 800m先のショッピングセンターにミサイルが落ちたこともあります。今でも、時々同じようなことが起きているのです。
　日本では大学で日本語の勉強をしています。弓道サークルにも入って、日本の友達もできました。大学では体育館が開放されているので他のスポーツもできます。大学からいろいろなサポートを受けているので問題はないですが、私は学生として日本に来たので、他の避難民の方々が受けているような経済的支援は受けられないのです。ですから、今イタリア料理レストランでアルバイトをしています。お客さんに注文を取るのはまだ少し難しいですが、この仕事は語学の勉強にもなるので気に入っています。
　先のことは分からないですが、しばらくは日本に住み続けたいと思っています。

ウクライナ侵攻から2年　避難者からのメッセージ

（5）ウクライナ東部出身　40代女性

　私たちは、2022年6月に日本に避難して来ました。最初は名古屋市外に住んでいました。元々ウクライナでは夫婦共に家のリフォームなどの改装業に携わっていたので、日本でもそれができないかと考えていましたが、ウクライナと違い、日本ではなかなか需要がなくうまくいきませんでした。それで、私は家でネイリストとして仕事を始めました。夫は個人的にある会社から声をかけていただき仕事を始めました。彼は日本語が話せませんでしたが、翻訳機をうまく使いながらコミュニケーションを取っていました。　3人の子どもたちは、小学校に通い出しました。最初の数ヶ月は、日本人の生徒とは別に日本語学習クラスで言語を学びました。しかし、高学年になると早い段階で他の日本人の生徒と同じように他の科目の授業にも出席しなくてはならなかったのです。そのため、低学年だった末っ子は結果的に一番長く言葉を学習することができたので、今、言葉の面で一番問題がないのは彼女です。言葉が通じないせいか、特に長女にはなかなか友達もできず、学習もはかどらず、学校が楽しくなかったようです。近所に外国籍の子どもたちが住んでいて、彼らはとてもフレンドリーだったので、帰宅後はその子たちとよく遊んでいました。

　そして、長女が小学校を卒業する時期になり、行く予定の中学校がかなり遠かったということもあり、それに合わせて名古屋市への転居を決めました。

　私はその頃名古屋市で週 2回ほどネイルの仕事をしていましたので、通勤に関してはとても便利になりました。子どもたちは、転居前に仲良くしていた友達と離れてしまったので少し気を落としていました。それでも時間が経つにつれ、下の二人の娘たちには友達もでき始めています。ただ、やはり長女はちょうど難しい年齢ということもあるのか、中学校にも馴染めないでいるようです。そういったこともあり、上二人の子は今インターナショナルスクールに進むことも検討中です。

　私たちにとって日本で抱える問題は、やはり言葉です。それをクリアしないと友達もできないし、仕事にもつながらないのです。

　その点、夫は今、量販店で働いていますが、言葉ができなくても、翻訳機を使って何とかコミュニケーションを取り、うまくやっているようです。初めて日本に来た時は、ウクライナとは全てが違っていて、常に戸惑いながら過ごしていました。が、今ではいろいろなことが少しずつ分かってきて、日本にいることが心地よいと感じることも増えてきました。ウクライナで安心して暮らせるようになるまで、しばらく日本で生活していきたいと思っています。

質疑応答

●参加者より情報提供：

・「警察庁　ウクライナによる防犯パンフレット　安心安全　Q＆A」https://www.npa.go.jp/topic/2022/20220415aa.pdf
パンフレット内に困ったときには110、119番に電話してくださいという案内があるが、実際に電話したときに言語対応ができるのかというのはわからない。パンフレットは警察庁が出しているため、都道府県によっても違うかもしれない。愛知県警には国際警察センターがあり、場合によっては通訳も可能かもしれないが、ホームページはロシア語のみとなっている。問い合わせたら対応できるかもしれない。「つどいの場」等でそうした警察の担当者に来ていただいて案内をお願いするのは一案だと思う。

・ウクライナでは事故が起きた時に絶対に警察に電話しなければならないということはなく、ただ、保険を使うかどうか、車の修理はどうするかなどはあるが、そのあと病気などは自分たちのお金で治療するなどの対応となる。日本では治療はとても高い。また、日本では事故が起きたら、まず警察を呼んで事故があったことを知らせる必要があるなど対応の順番がある。それを避難者に教えなければならないと思う。今後、「つどいの場」などでそうした案内をしていきたい。

・愛知県警の知り合いから情報提供があった。外国語対応については、メジャーな英語、中国語はどこの署にも通訳がいるが、ウクライナ語等希少言語については通訳センターが電話で対応に入るため、3者通話となり、手間取ることが実は多いとのこと。ただ、警察官が現場に出向くときは、自動翻訳機を持っていくことになっているので、外国人であっても翻訳機を使い、現場で対応することになっている。

・日本では、交通事故に遭ったときに保険会社等が間に入り、当人同士は直接対応することはほぼないが、そのような習慣を知らない場合は「外国人だから直接対応しないのでは・・」等不安になるケースも多い。病院でも保険は使えないことを知らない外国人が多いので、そうしたことも含めて伝えていく必要があると思う。

ブレイクアウトルーム意見交換

ルーム1：
・ベトナム現地から参加があり「新しい知識だった」という感想を頂いた。ベトナムでもウクライナの戦争について報道されている。
・食品支援をしていただいている団体の方の参加があり、新しいつながり方、避難者を交えたことができないかと提案していただいた。
・手紙の代読はこれまでと違い心に刺さるものがあった。こういったメッセージを読む会をしてはどうか。
・避難者の支え方について学びがあった（能登半島支援に入っている方より）

ルーム2：
YOU＆Iの活動について詳細を聞くルームとなった。技能実習生の再就職のために農業や漁業、アクセスが難しい中、丁寧に関わっていらっしゃる様子を伺った。また、1月14日から物流を確保して必要な物資を届けたと報告があったが、震災が発生後、どんどん問い合わせが来る中で、連絡先を逐一記録し、必要な人に声をかけて倉庫や物流先を確保、繋げながら進めてきたという話だった。現場で判断し、関わる人たちが独自につながりを作れる組織の背景に、 30カ国80人のSNSを通じた繋がり、大使館とも直接連絡が取れるようになっている。そのようなベースがすごいと感じた。ウクライナ支援を通じて YOU＆Iとの繋がりができたことは力強い。取り組みを進めながらお互いのネットワークをどう作り上げていくか、そういったプロセスも、また機会があれば伺いたい。

ルーム3：
石川県からご参加頂いた谷さんリュボフさんご夫妻への質問タイムとなった。避難者のグループのテレグラム（　SNS）に情報を発信しても返信が返ってこない。情報は受信をするが発信はしてもらえないという課題があり、愛知でも同じ課題があると共有した。また、避難者が近隣とのトラブルになっているケースを紹介いただき、一緒に考えた。

ウクライナ避難者支援のための寄付にご協力をお願いします

郵便振替00810-7-215694 口座名義:レスキューストックヤード
(ゆうちょ銀行以外の金融機関からのお振込み)
ゆうちょ銀行(金融機関コード: 9900)・〇八九(ゼロハチキュウ)店(店番: 089)
当座　0215694　口座名義:レスキューストックヤード

※領収書は認定NPO法人レスキューストックヤードからの発行となります。